

シベリアよ

大阪府 吉岡芳延

日本タモイダモイとだまされ続けて、昭和二十年暮れ着いたところはハバロフスクの北東に位置するエバラン湖の畔、第三〇五収容所であった。

冬將軍がやって来た。零下四十度という寒さである。

新兵どもはテントに入れられ夜は寒さで眠れず、一時間ごとに尿意に目醒め、皆便所に走りつくまで我慢ができず広場の白い雪の上に洩らしてしまい、翌朝広場も黄色く汚れていた。

降雪も多く我々の食糧を運ぶ車も走行不能となり一か月たっても食糧は来なかった。初めは自分たちが身につけた米を出しておかゆをつくり当分はやれたが、ついに米もなく、もちろんパンもない。飯ごう八分目の塩湯に大豆が十粒ほど底の中に沈んでいるだけ皆弱ってきた。その上シラミがふえ、夜中全員雪の上に整列させられ

全裸になって衣類からシラミをボロボロとはたき落とし、一時間もすればまたモゾモゾと身体を這い回る。

手をズボン下の縫目に沿ってこさげると手の平に数十匹のシラミで、それを食いつぶした。そんな調子が雪の解け出すころまで続いた。当然皆栄養失調の上にシラミに血を吸い上げられ、かまれたかゆさに掻き破り、疥癬となりさらに発疹チフスに冒され、次々と祖国よ父母よ妻子よと望みを空に死んで行った。他の収容所から転属して来た兵の話では、ある収容所のソ連所長が大佐かなんかで、その人のお父さんが日露戦争のときに日本の捕虜となったとき、日本人に非常に親切にもらったといい、日本軍抑留者を大事にしてくれたといううれしい話もあったが、栄養失調、発疹チフス等のため二千人全員死亡した収容所もあるとか。

雪が解けて食糧は来たが、所定の量の一食二百五十グラムの黒パンもコウリヤン粉の上に水分多く、目方をこまかした小さいもので毎日毎日空腹だった。

作業は森林伐採、道路、鉄道路盤構築等でなかなかの重労働であり、ノルマを達成すると次の日は目標を上げ

てくる。ノルマを達成した者には夕食にパン五十グラムと一握りのマホルカ煙草をくれる。私はノルマを達成したことはない。私はパンよりたばこが欲しかった。満鉄時代夜勤の眠さをたばこで押さえてたばこが一番好きだった。他の者にたばこひと握りと明朝のパン一食とかえてもらった。

仕事もますますきつく、身体は弱り足も上がらぬほどとなった。路盤工事は夜間もやったので、私たちは路盤台地の草けずりをやめて、すぐ草地の上に土を盛り手抜き工事をやり出した。

夜になって時々テント内の土間にいろは四十八文字を書いた大きな紙の上に箸三本の頭をくくり、日本国三か所の稲荷大明神の Cockkuri さん呼びいろはと聞いていた。ある夜 Cockkuri さんは天皇陛下は富士山に無事でおられるから安心せよ。しかしお前たちは近ごろ手抜き工事をやっているが、将来この鉄道はお前たちのものになるによって立派な工事をするようにとのたまった。

いつ帰れるかわからぬ厳しい日々もやがて二度目の冬將軍を迎えた。零下六十度である。昭和二十二年正月に

はいったある夜、数日続いた零下六十度に収容所のストーブにたくまきがなくなった。私ともう一人まきづくりを命令された。大鋸と斧を持って街門を出た。腰の辺までの雪の中を森に入り、手ごろな木を切り斧で割り夜十時から朝方まで続けた。

その日私は発熱四十度を越し意識もうろうとし、たわごとを言っていることが自分でわかった。そのうち夢のような状態で私は故郷の米子の町を歩いていた。一軒の小さな酒場があった。私は一杯飲もうとのれんに手をかけると、中から一人の女が入るなと手を広げた。よく見ると私の家内である。ハッと思ったとたん夢から覚めた。女軍医は私の胸にやわらかい耳を当てて注射を打ち急性肺炎と診断し、第三病院（三〇八収容所）に入院した。

収容所の病室の三段ベッドで寝ていたとき、私は中段に寝ていたが上の方から米粒のようなものがポロポロと落ちて来た。シラミである。上の戦友が死んだのである。死体が冷えてくるとシラミは逃げ出すのである。

さっきまで話していた戦友の声が聞こえなくなった。

彼も白い飯を食べたいと言いながら私の隣で死んでいった。

割合に早く昭和二十二年十月二十二日故郷の米子に帰った。五歳くらいの子が一人で玄関で遊んでいたが、私の姿を見ると、おじいちゃん兵隊さん来たと家の中へ走り込んだ。

私の家内は昭和二十年暮れ私がシベリヤに着いたころ、生きて帰らないだろうと三歳の長男を置いて他家（酒場の女将）へ嫁ぎもう子供もできていた。

抑留生活の体験

石川県 中川 政義

昭和二十年八月十三日、私は新京にある経理学校から原隊復帰を命ぜられ、その帰途豆満江河沿いの道路でソ連将校の乗ったトラックに出会った。生まれて初めて見るロシア人。絶望と恐怖感で生きた心地がしなかった。どこかへ連れられていくのか、そして殺されるのだろうか

と覚悟を決めたとき、ふと浮かんだのは母の姿だった。

間もなく間島の収容所に運ばれた。そこから日本に帰れるのだというデマに勇気づけられながら、二百キロに及ぶ徒步行軍と八日間の天幕生活を余儀なくされた。しかし、自分たちの希望とは全く逆の方向に、北へ北へと貨車輸送され、コムソモリスク地区の収容所に到着したのである。そこでは主に建設作業を中心に穴掘り、コンクリート打ちにれんが積み、大工作業と、どれをとっても不なれな仕事ばかり、厳寒と休みなしの労働に疲労こんぱいに達した。一方食事は作業成績によって四等分されていた。すなわち、作業パーセント八〇%未満が一級食、一〇〇%未満は二級食、一二五%未満は三級食、一二五%以上が四級食になっている。各級食ごとのパン、穀類、野菜、肉、バター、砂糖などの定量に記憶はないが、二級食においてはたしかパン二百グラム、穀類二百五十グラムの少量で、一日二千四百カロリーは摂取されていなかったように思う。

私の収容所では終戦の年から翌年にかけて回帰熱という伝染病が蔓延し、一時は遺体の収容と墓場の穴掘りが